

# ラテラルシンキング演習と自己肯定意識の変化に関する一考察

○高城佳那・佐藤寛子  
(静岡産業大学経営学部)

## 研究の目的

エドワード・デボノによって提唱されたラテラルシンキングは、1960年代に水平思考として日本でもブームになった。以降、近年ではビジネス現場におけるイノベーションを促進する思考法として再び注目されている。ラテラルシンキングは誰もが磨くことができ、ある種の精神的態度であり、頭脳の習慣であるとし、1. 支配的なアイデアを見つけること、2. いろいろなものを見方を探し求めること、3. 垂直志向の強い統制から抜けだすこと、4. 偶然のチャンスを活用することが原則であるとデボノは主張した。ラテラルシンキング演習は、その思考法において正解を求めるのではなく、思考の視点を広げることが目的としている。閉塞した自身の思考は他者の視点を受け入れることで展開や発展が期待できるため、ラテラルシンキングを磨く土壌には目的集団における様々な視点の交錯とそれらを一旦受け入れ、展開や発展を図る関係性が基盤となると筆者らは考えた。

一方、内閣府の調査(2014)では日本の若者の自己肯定感の低さが注目される。自己肯定意識とは青年期に発達する自己意識の1つとされ、「自己への態度の望ましさ(自己肯定性次元)」とする(平石、1990)。これらの結果は、日々大学生たちと共に過ごしている筆者らも感じるところである。そこで本研究では「あらゆる提案を肯定的に受け入れる」環境に着目し、ラテラルシンキングを用いた活動を繰り返す中で、自身の提案が肯定的に受け入れられる経験が、自己肯定感に影響を及ぼすのではないかと仮定し、大学生の自己肯定意識の変化を検討したものである。筆者らは、自尊感情の向上要因となる諸活動について研究しており、その予備調査にあたる。

## 方法

**調査対象者** ゼミナール学生 51名を対象者とした。同意の得られた者は44名、連結可能な比較対象となったものは27名(女性9名、男性18名)であった。

**調査方法** 筆者らの担当するゼミナール授業内

で任意の対象者のみに自己肯定意識尺度(平石、1993)をラテラルシンキング演習の初回と最終回に実施し、2度目には自由記述欄を追加した。ラテラルシンキングの演習は、毎週の授業の初めに計11回、13問を実施した。

本研究は、静岡産業大学大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号:k22012)。

## 結果と考察

自己肯定意識尺度プレテストの結果を平石(1993)が得た学生平均値と比較すると、女性はすべてにおいて平均値にとどかず、特に「自己閉鎖感・人間不信」は平均値16.84点に対して25.55点、「被評価意識・対人緊張」は平均値19.34点に対して27.11点であった。一方、男性は大学生平均値との差異は僅かであった。「充実感」においては平均値23.98点に対して本学男子学生の平均は30.77点と高くなっていた。次にラテラルシンキング演習前後の平均値を比較すると、対自己領域すべてで平均値が上がっていた。対して対他者領域においては、全体、男性の「自己閉鎖感・人間不信」と女性の「被評価意識・対人緊張」の平均値が上がっていた。全体( $t(26)=2.246, p<.05$ )と男性( $t(17)=2.618, p<.05$ )の「自己実現態度」で有意差があり、女性( $t(8)=2.548, p<.05$ )と全体( $t(26)=2.842, p<.01$ )では、「自己表明・対人的積極性」に有意差があった。以上の分析結果から、ラテラルシンキングの思考演習を通して、自分を理解し前向きな姿勢で何かに取り組む意欲と、自主的に人前や友人間で自己の主張を納得できるまで話し合う積極的自己表明が向上する可能性が示唆された。

## 結論

ラテラルシンキング演習の実施で自己肯定意識が、全体と男性に「自己実現態度」、女性と全体では、「自己表明・対人的積極性」に有意な差が認められ、自己理解とやる気や意欲の向上と積極的自己表明の向上が示唆された。

本研究は有効回答数が27であるため、結果の適応は慎重にならなければならない。